

北陸自動車道関連遺跡
発掘調査報告書

VII

(高月町瓢塚古墳)

1982.3

滋賀県教育委員会

財団法人

滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県教育委員会では、北陸自動車道の建設に先き立って、遺跡の発掘調査を昭和48年度より実施していますが、56年度中に、一部を除いて、関連17遺跡のすべての現地調査を終了する予定です。これらの結果については、その一部をすでに報告したところですが、このたび、昭和51年度に実施した高月町瓢塚古墳の発掘調査の結果を報告するはこびになりました。

瓢塚古墳の調査を実施してからすでに、5年の歳月がたっていますが、自動車道の早期開通を期待する当時の情勢を考慮して、現地調査を優先する方針をもったため、今日に至った次第です。当古墳は、湖北地方ではまれな古墳時代中期の大型古墳で構成される物部古墳群の一翼を荷うものです。今回の調査は、路線に係る墳丘周囲のみの調査でしたが、当古墳の古墳時代に占める位置は重要であり、今後、古代史解明のための貴重な資料となるものと思います。

埋蔵文化財の場合、各人の文化財に対する正しい認識によって、歴史に新たなページを書き加えることができるのであり、本報告書がここに上梓されたことで、その認識の一助となれば、最も幸せとするところであります。

最後に、発掘調査および整理業務等に日夜努力いただいた調査員の方々ならびに地元関係者の方々に感謝いたします。

昭和57年3月

滋賀県教育委員会
教育長 南 光 雄

目 次

はじめに	1
I. 歴史的地理的環境	2
1. 地理的環境	4
2. 歴史的環境	4
II. 調査の経過	5
III. 調査の結果	6
1. 墳 丘	7
2. トレンチ調査の結果	7
IV. 遺 物	9
V. 湖北地方の前方後円墳	10
おわりに	31

挿 図 目 次

図1. 瓢塚古墳位置図及び周辺古墳分布図	2
図2. 瓢塚古墳周辺地形図	3
図3. 瓢塚古墳墳丘測量図	6
図4. トレンチ断面土層実測図	8
図5. 出土遺物実測図	9
図6. 湖北地方の前方後円墳分布図	13
図7. 丸山古墳群墳丘測量図	15
図8. 姫塚古墳墳丘測量図	16
図9. 横山神社古墳墳丘測量図	17
図10. 古保利第75号墳墳丘測量図	18
図11. 若宮山古墳墳丘測量図	18
図12. 茶白山古墳墳丘測量図	19
図13. 垣籠古墳墳丘測量図	19
図14. 丸岡山古墳地形図	20
図15. 山津照神社古墳墳丘測量図	20

図 版 目 次

- | | |
|---|--|
| <p>図版一 (上)瓢塚古墳遠景
(下)瓢塚古墳近景</p> <p>図版二 (上)第1トレンチ全景
(下)第1トレンチ断面土層(1)</p> <p>図版三 (上)第1トレンチ断面土層(2)
(下)第1トレンチ断面土層(3)</p> <p>図版四 (上)第2トレンチ全景
(下)第2トレンチ断面土層(1)</p> <p>図版五 (上)第2トレンチ断面土層(2)
(下)第2トレンチ断面土層(3)</p> <p>図版六 (上)第3トレンチ断面土層(1)
(下)第3トレンチ断面土層(2)</p> <p>図版七 (上)第4トレンチ全景
(下)第4トレンチ断面土層(1)</p> <p>図版八 (上)第4トレンチ断面土層(2)
(下)第4トレンチ断面土層(3)</p> <p>図版九 (上)第4トレンチ断面土層(4)
(下)第4トレンチ断面土層(5)</p> <p>図版一〇 (上)第4トレンチ断面土層(6)
(下)第4トレンチ断面土層(7)</p> <p>図版一一 (上)第4トレンチ断面土層(8)
(下)第4トレンチ断面土層(9)</p> <p>図版一二 (上)第4トレンチ断面土層(10)
(下)第4トレンチ断面土層(11)</p> <p>図版一三 (上)第5トレンチ全景
(下)第5トレンチ断面土層(1)</p> <p>図版一四 (上)第5トレンチ断面土層(2)
(下)第5トレンチ断面土層(3)</p> <p>図版一五 (上)第5トレンチ断面土層(4)
(下)第6トレンチ全景</p> | <p>図版一六 (上)第6トレンチ断面土層(1)
(下)第6トレンチ断面土層(2)</p> <p>図版一七 (上)第6トレンチ断面土層(3)
(下)第6トレンチ断面土層(4)</p> <p>図版一八 (上)第7トレンチ断面土層(1)
(下)第7トレンチ断面土層(2)</p> <p>図版一九 (上)第8トレンチ断面土層(1)
(下)第8トレンチ断面土層(2)</p> <p>図版二〇 (上)第7トレンチ遺物出土状態
(下)第7トレンチ遺物出土状態</p> <p>図版二一 出土遺物</p> <p>図版二二 (上)瓢塚古墳
(下)横山神社古墳</p> <p>図版二三 (上)瓢塚古墳
(下)姫塚古墳</p> <p>図版二四 (上)涌出山古墳群
(下)飯喰山古墳</p> <p>図版二五 (上)長浜古墳群(丘陵上の一群)
(下)茶白山古墳</p> <p>図版二六 (上)茶白山古墳南接丘陵の一基
(下)垣籠古墳</p> <p>図版二七 (上)長屋敷古墳
(下)越前塚古墳</p> <p>図版二八 (上)上島塚古墳
(下)丸岡山古墳</p> <p>図版二九 (上)狐塚古墳
(下)人家山古墳</p> <p>図版三〇 (上)塚の越古墳
(下)山津照神社古墳</p> |
|---|--|

例 言

1. 本書は、日本道路公団の実施する北陸自動車道建設工事に伴う高月町瓢塚古墳発掘調査報告書である。
2. 本調査は、滋賀県教育委員会の指導のもとに、日本道路公団の委託により、滋賀県が受託し、滋賀県が財団法人滋賀県文化財保護協会に再委託して実施した。
3. 本書は、昭和51年度に発掘調査を実施し、昭和56年度に整理した成果である。
4. 調査及び整理、報告書刊行については、滋賀県教育委員会文化財保護課 技師 田中勝弘が担当した。また、現地調査及び整理事業には以下の諸氏の協力を得た。

林 純(現財団法人滋賀県文化財保護協会技師)、阪口勝彦、川上真成、藤村善嗣、飯野清志、岡井 誠、芳村高史、南部 基、鈴木俊則、吉元達成、宮崎雅美、上羽基之、井塚哲夫、北脇泰久、藤井益夫、岸本好弘、平通 茂、武田知久(以上、京都産業大学考古学研究会)

5. 本書の執筆、編集は田中勝弘が当り、遺物の実測、図面の整理、作図等については、主として井塚哲夫、北脇泰久、藤井益夫、岸本好弘が当った。

はじめに

瓢塚古墳は、前方部を北面させる前方後円墳と考えられているもので、北陸自動車道のルート決定に当って、墳丘部と考えられる部分避け、保存が計られたのであるが、本線部分及びその側道が墳丘に接して通過するため、周濠等、墳丘周辺部の調査が必要となったのである。現地の調査を実施してから、すでに5年の歳月が経過しているが、当時、北陸自動車道の建設が急ピッチに進行している状況にあり、日本道路公団の要請もあって、以降の遺跡調査に当っては、現地調査を優先させ、整理業務、報告書の刊行については、自動車道に関連するすべての遺跡の現地調査終了後に行なうものの方針決定したのである。現在、余呉町桜内遺跡の発掘調査を実施中であるが、現地調査を補助してくれた学生達は、すでに卒業し、社会人となってしまっており、また、現地調査後、日時がたちすぎているため、一刻も早く資料を公開する義務感にかられ、急提、本年度に整理し、報告書を刊行することにしたのである。

整理及び報告書刊行業務は、原因者である日本道路公団が費用（1,000,000円）負担し、昭和56年度事業として、滋賀県教育委員会の指導のもとに滋賀県が再委託して、(財)滋賀県文化財保護協会が実施した。

なお、報告書刊行に至るまでには、京都産業大学考古学研究会の会員の方々に多大な協力を得た。また、当時、日本道路公団大阪建設局長浜工事々務所におられた益田楨三氏には、公私ともお世話になった。ここに記して謝意を表します。

I 歴史的地理的環境(図1, 2)



- | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 1 大音古墳群 | 2 西山古墳群 | 3 西山山頂古墳群 | 4 小山古墳群 | 5 赤尾古墳群 |
| 6 西野古墳 | 7 磯野古墳群 | 8 松尾古墳群 | 9 富山古墳群 | 10 西野古墳群 |
| 11 古保利古墳群 | 12 山本山古墳 | 13 若宮山古墳群 | 14 ゴンベ穴古墳 | 15 父塚古墳 |
| 16 みち塚古墳 | 17 姫塚古墳 | 18 長塚古墳 | 19 大將軍古墳 | 20 生塚古墳 |
| 21 横山神社古墳 | 22 兵主神社古墳 | 23 横山古墳? | 24 唐川古墳群 | 25 涌出山古墳群 |
| 26 唐川西古墳群 | 27 唐川北古墳群 | 28 饅頭塚古墳 | 29 瓢箪塚古墳 | B 涌出山古墳 |

図1 瓢箪古墳(A)位置図及び周辺古墳分布図

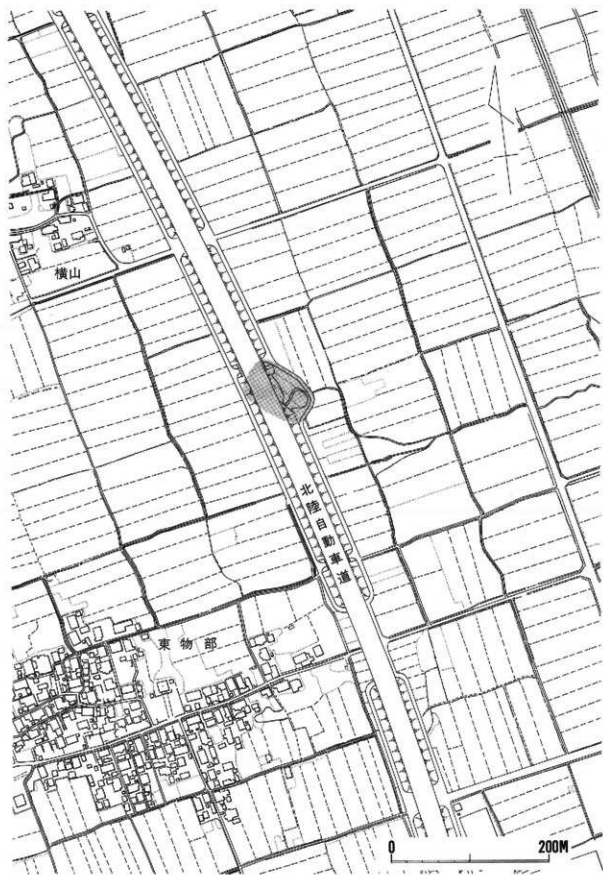


図2 縣塚古墳付近地形図(網部縣塚古墳)

1. 地理的環境

瓢塚古墳は、伊香郡高月町横山字ガンデン及び一本木に所在する。国道8号線より西方300m程入り、横山及び東物部の両集落のほぼ中程の水田中にある。周囲水田の標高は108.32m～108.7mで、ほとんど起伏のない平地に立地する。

2. 歴史的環境

瓢塚古墳の周辺は、条里の遺制が良く残る。古墳は、南北二坪にまたがり、特に、後円部を二分して坪界が通っている。湖北平野、特に高月町の西半分には非常に多数の古墳の分布が知られている。瓢塚古墳の立地する平地には、その南西方に、現存長で70m（復元して96m）を計る前方後円墳である姫塚古墳があり、南方に、前方後円墳かとされている長塚古墳、北西方に、横山神社及び兵主神社の二前方後円墳と古墳時代中期の古墳があり、瓢塚古墳を含めて物部古墳群を形成している。群中には、みち塚・生塚・將軍塚古墳等円墳、方墳が現存しており、本来、多数の古墳が存在したであろう一大古墳群であった様子がうかがえる。北方の独立丘となっている涌出山、西方の地累状の山丘には、多数の前方後円墳が円墳を従えて築造されている（涌出山・古保利古墳群）。いずれも古墳時代中期のもので、この頃の当該地域の重要性をうかがい知ることができるのである。古墳時代前期にさかのぼるものとしては、当古墳西方の地累状山丘の南端、湖北町山本に若宮山古墳が存在する。この頃の古墳は多くを知らないが、高月町西阿閉の円通寺遺跡、姫塚古墳周辺の東柳野遺跡、涌出山南方の唐川遺跡、木ノ本町赤尾の中居谷遺跡等弥生時代から古墳時代にかけての集落跡が知られており、古墳を出現させる条件は十分にあったと考えてよい。古墳時代後期には、前方後円墳の存在は知られていない。一方、かつて、前方後円墳を築造した涌出山や地累状の山丘の頂上や山裾に、多数の群集墳が出現する。具体的には、阿閉塚・桜尾・八ツ岩・山畑・宮山・寺山・西野・赤尾・西山・小山・西山山頂・大音・唐川等の諸群集墳である。

湖北平野北部は以上のように、古墳時代全般にわたって古墳の築造が見られる反面、中期に多数の前方後円墳が築造され、また、その中頃には急激に大型化し、後期にはすでに前方後円墳が築造されなくなる一方、群集墳が発達する等、非常に複雑な変遷を示している。しかし、複雑な変遷を示しているが、それだけ当該地域が歴史上重要な所であったことを物語るのであって、その意味を明らかにすることによって、歴史の一ページを開くことができるものと思う。

II 調査の経過

瓢塚古墳は、前方後円墳として周知されていたものであり、北陸自動車道建設工事に当っては、擁壁によって避けられ、側道も迂回して計画されたのであるが、いずれも、墳丘部に接しているため、周濠等の有無を確認する必要があり、発掘調査を実施することとしたのである。

調査は、まず、墳丘及び周辺の地形測量図を作成し、この測図にもとずいて、墳丘部周辺にトレンチを設定し、周濠等を確認した上で墳形を確定することとした。次いで、古墳に係る範囲で、路線内全域の調査に移行するという方針を取った。結果的には、トレンチ調査によって、古墳に関連する遺構やその他の遺構についても検出できず、従って、全面発掘は実施しなかった。

今回の調査では、古墳の墳形、規模、年代等を知る手掛りは得られなかったのであるが、測量図を作成しており、また、当古墳の占める歴史的な位置は非常に重要と考えるので、以下に、湖北地方の前方後円墳に関して若干の考察を加え、その位置付けを試みた一文を附して報告する次第である。

Ⅲ 調査の結果(図3)

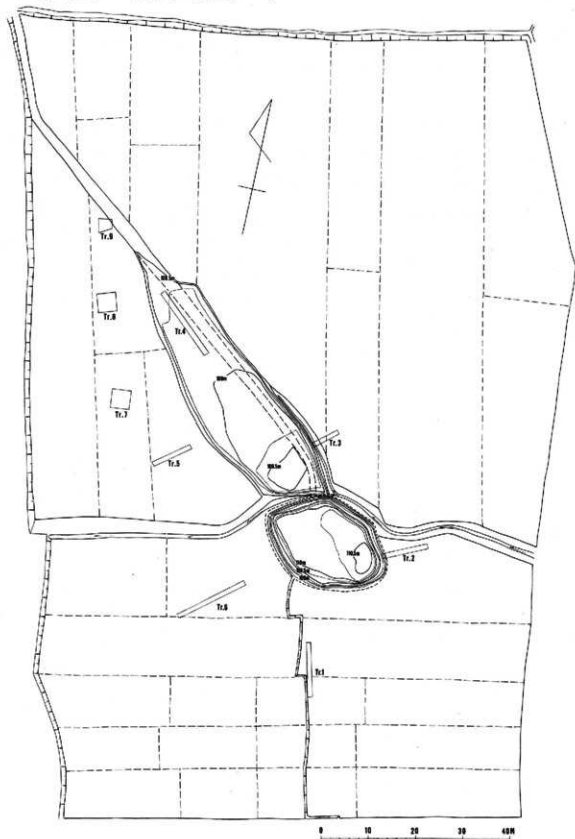


図3 瓢塚古墳地形測量図及びトレンチ配置図

1. 墳 丘

トレンチ調査によっても開濠等、墳形を確定する資料を得ることができなかったので、ここでは、作成した測量図について説明することとする。

現在、墳丘と考えられる部分は、全長86mを計り、南北に長く、墓地あるいは畑地として残っている。周囲はすでに水田化している。現形で長軸線を取ると、ほぼ、N43度Wの方向にある。前方部と考えられる部分は畑地となっており、北方へのびる。後円部とされる部分は墓地であって、両者を切って農業用小水路が通っている。

現存の数値を示すと、後円部と推定される部分は、長軸線に沿って長い不正楕円形を呈している。長軸は28.2m、短軸は19.9mで、頂部はこれに合わせて、23m×14mの平坦面を形成している。墳頂部は墓地のために削平されていると考えられるし、また、墳丘側面も削平を受けていて、旧状を保っていない。墳頂最高所は、標高 110.5mで、周辺水田が、108.32mから 108.7mの間 にあり、従って、およそ2mの高さを残す。

前方部と思われる部分は、長さ62m、最大幅18.2mを計る。南から北に向って徐々に低くなり、1mの落差を持つ。最高所の標高は 109.5mで、後円部との比高は1mである。最低所は 108.5mで、附近水田に対し、わずか20cm程高くなっているにすぎない。前方部も旧状を保っていない。

2. トレンチ調査の結果(図4)

トレンチは9カ所に設定した。このうち、第4トレンチのみが、前方部と考えられる部分に設定したものであり、他は、すべて周辺の水田に設定したものである。また、幾つかのトレンチは、墳丘部から離れて設定しているが、これは、北陸自動車道の用地の関係で、特に意図はない。

まず、前方部に設定した第4トレンチの断面土層から説明する。ここでは、厚さ10cm足らずの表土層下に、10cm程の厚さに黄褐色粘質土の堆積がみられる。この下方は、黒色の礫層が厚さ20cm程続き、以下は、黄灰色砂礫層の地山に続く。なお、トレンチ南半分、すなわち後円部側には、黄褐色粘質土層と黒色礫層との間に、黒褐色の礫層が、厚さ5cm程堆積している。上方黄褐色粘質土層までの2層は後世の堆積であるが、以下の地山までの間はすべて礫層であり、墳丘の盛り土を思わせる堆積土層は観察し得なかった。

第2トレンチは、後円部墳丘の東側に設定したもので、その一部が墳丘にかかるものである。わずか50cm程係るだけであるが、厚さ10cm程の表土下は灰色の礫層である。また、水田部分は、耕土・床土下方には、やはり礫の堆積がある。

第3トレンチは、前方部の東側に接して設けているが、やはり、耕土下方は礫層である。

第1トレンチも同様、礫及至砂礫の堆積が認められる。

- | | | | |
|---------------|-------------|--------------|------------|
| 1 耕作土層(黄灰色) | 11 灰褐色土層 | 21 二枚茶色粘質土層 | 31 黒褐色土層 |
| 2 黄灰色粘質土層(灰土) | 12 砂層 | 22 黒二枚茶色粘層 | 32 黄褐色土層 |
| 3 黄褐色土層 | 13 灰褐色粘層 | 23 茶褐色粘質土層 | 33 黄褐色粘質土層 |
| 4 暗灰色砂粘層 | 14 黄褐色粘質土層 | 24 黒褐色粘質土層 | 34 黄褐色砂質土層 |
| 5 黄灰色砂粘層 | 15 黄褐色粘層 | 25 灰黒褐色粘質土層 | 35 灰色砂質土層 |
| 6 黄褐色砂粘層 | 16 黄褐色粘層 | 26 二枚茶色土層 | 36 黒色土層 |
| 7 灰褐色砂粘層 | 17 黄二枚茶色粘層 | 27 明二枚茶色粘質土層 | 37 黒灰色土層 |
| 8 黄灰色砂粘層(地山) | 18 黄二枚茶色砂粘層 | 28 暗灰色土層 | |
| 9 灰土 | 19 灰茶色粘質土層 | 29 黄灰色土層 | |
| 10 灰黄色土層 | 20 明二枚茶色土層 | 30 黄二枚茶色土層 | |

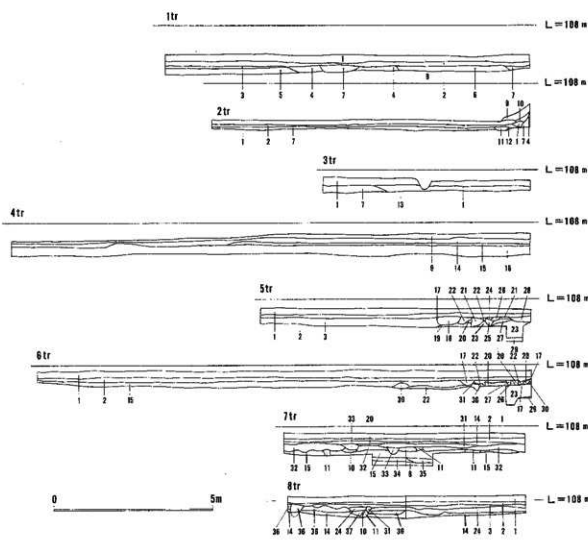


図4 トレンチ断面土層実測図

第5トレンチは前方部の西側、第6トレンチは後円部の西側に設定したものである。ここでは、耕土・床土と地山との間には礫の堆積は少なく、粘土及至砂層の堆積が見られる。

第7～9トレンチにおいても、耕土下方は粘質土及至砂の堆積が認められ、礫層は、表土下50cm程で見られる。

以上のトレンチにおける断面土層を観察する限り、古墳を境にして、その東側では礫層の位置が高く、西側では低く、従って、西方へ向けて傾斜する礫層があって、低位側には粘質土あるいは砂の堆積が見られることになる。

トレンチは、後円部のほんの一部及び前方部の北端の一部に係るのみで、いずれも墳丘部と思われる部分には礫の堆積が認められる。ただ、第2トレンチは後円部の裾端部にわずかかかるのであり、前方部も、現状で水田面よりわずか20cm程高いだけであって、いずれも、大きく削平された部分であって、礫が墳丘の盛土とは考えられない。水田部分に係るものに関しても、溝等の遺構はなく、わずかに、古墳の西側に設定した第5及び第7トレンチで、若干の遺物が出土しているにすぎない。

IV 遺物(図5)

第1トレンチの表土中より、須恵器の碗形品の小片が出土している。図示できるもの(2)の1点は、逆三角形のやや高い高台部分で、灰白色を呈した山茶碗風のものである。

第5トレンチからは、礫層上に堆積した茶褐色土中から、須恵器の杯蓋(1)が出土している。口径13.9cmの小形品で、やや中高の扁平で小さなツマミが付き、扁平な天井部からゆるやかに屈折して口縁部に至る。口縁端部は、ツマミ出したように小さく垂下する。平城宮跡SD 650に類品があり、9世紀代のものであろう。

第7トレンチからは、須恵器の大型壺(6)が、かたまって出土した。およそ80cm×60cm程の範囲

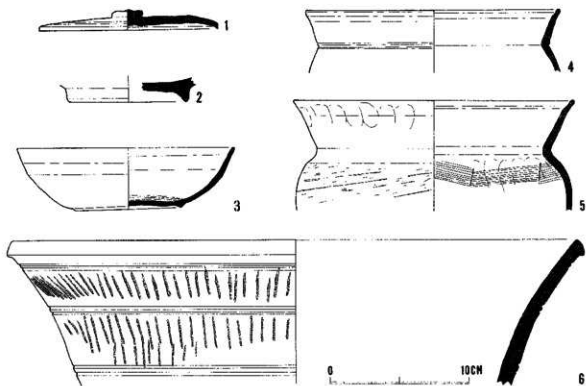


図5 出土遺物実測図

に散乱した状態であり、すべて同一個体と考えられるが、接合し得ない。また、その破片数は、全体の10分の1に満たない。堆積土層は、やはり礫層上方の堆積土中で、ビット等は検出できなかった。口径39.6cmを計る。逆ハの字形に開いた口縁部はやや内弯し、端部はまるくおさめ、わずかに肥厚する。口縁部外面には、2条一對の凹線が三段まで認められ、凹線の間には、櫛状工具による刺突列点文がめぐらされている。

以上は、トレンチ内の堆積土中からの出土であるが、遺構に伴うものではない。また、古墳時代までさかのぼるものはなく、すべて平安時代まで下る。出土トレンチは、古墳の西側に限られ、西傾する礫層上面に堆積した粘質土乃至砂層中からの出土である。従って、古墳築造後の周辺の開発時期を知ることのできる遺物といえる。

なお、出土状況は不明であるが、黒色土器の椀(3)、甕(4・5)がある。椀は、逆三角形の低い高台であるが、安定している。

甕は2個体分がある。2点は、口径が20.4cm及び19cmとほぼ同大であるが、一方(5)は口縁部が長く、端部がわずかに外反して丸くおさめるのに対し、他方(4)は、口縁部は短かく、端部内側に一条の沈線がめぐる。体部は外面をへら磨きして整えている。いずれも器壁は極めて薄く、硬質であり、黒色土器の製法を示している。平城宮跡SD 650Aに類品があり、9世紀後半のものである。

V 湖北地方の前方後円墳

長浜市を含む伊香・東浅井・坂田の湖北三郡には、別表の通り40基程の前方後円墳が分布する(図6・表1)。この中には、現状では墳形を確認できず、郡志等の記載に基づくものや、伝承、地名等により報告されているものも含む。また、可能性として残されるものも含めた。将米の詳細な調査によって増減することが見込まれるのであるが、40という数値は、おそらく実数に近いものであると考えられるのであり、その分布状況についても、大幅な修正は少ないものと思う^①。

さて、従来、古墳相互の地理的近縁関係を以て、「群」として把握し、それを同一地域首長系譜の墳墓群として見てきた。また、令制の郷域が、およそ、政治的地域集団の範囲と考え、同一郷域内に所在するものを、やはり、同一首長系譜の墳墓群とし、地理的に若干遠隔であっても一群としてとらえてきている。このように、かつて、前方後円墳を含んで一群としてきたものを令制の郷域に当てはめて列挙すると以下の通りである^②。

丸山古墳群^③——東浅井郡塩津郷(図7)*

涌出山古墳群——伊香郡楊野郷

No.	古墳名	所在地	立地	内部主体	ハニワ	墓石	全長	備考
1	丸山古墳	伊香郡西浅井町長津中	丘陵				21m	円筒1基伴う。前方後円墳か？。
2	横渡梁古墳	高月町洞川	平地					"
3	風出山1号墳	高月町洞川	丘陵					前方後円墳か？。
4	風出山1号墳	高月町洞川	丘陵					"
5	横渡梁古墳	高月町洞川	平地					現存長86m。横渡梁88~96m。周濠。埴土重畳せず。円筒多数伴う。
6	瓢箪塚古墳	東郷野	"				36.2m	"
7	瓢箪塚古墳	東郷野	"				41.2m	"
8	長保利6号墳	西郷部	"				39.2m	"
9	長保利10号墳	熊野	"				28.65m	"
10	"	"	"				55m	"
11	"	"	"				37m	"
12	"	"	"				78m	"
13	"	"	"				50m	円筒1基伴う。土師器出土。前方後円墳か？。
14	"	"	"				約40m	"
15	"	"	"				35m	孤立貝式古墳か？。
16	"	"	"				約40m	円筒数基伴う。前方後円墳か？。
17	西野山古墳	東浅井郡湖北町山本	丘陵	竪穴式石室？			92m	名称未定
18	若野山古墳	東浅井郡湖北町山本	丘陵					"
19	丁野岡山1号墳	山縣岩原	丘陵					所在不明
20	丁野山藤原古墳	山縣岩原	丘陵					鎌、剣、刀、勾玉、管玉、小玉。前方後円墳か？。埴土に石片散乱。前方後円墳か？。集石部径30cm。玉頸。周濠有り。全長170m。孤立貝式古墳か？。
21	飯喰山1号墳	河毛	丘陵				50m	"
22	龜塚古墳	1野	丘陵					"
23	茶臼山古墳	浅井町八島	丘陵					"
24	茶臼山古墳	浅井町八島	丘陵					"
25	茶臼山西後丘段墳	長浜市東上原町	丘陵					"
26	才オキサキ古墳	川越町	丘陵					"
27	坂前古墳	東上原町	丘陵					"
28	長前古墳	加神町	丘陵					"
29	長前古墳	加神町	丘陵					"
30	越上丸赤山古墳	標部町	丘陵					"
31	越上丸赤山古墳	標部町	丘陵					"
32	越上丸赤山古墳	標部町	丘陵					"
33	越上丸赤山古墳	標部町	丘陵					"
34	越上丸赤山古墳	標部町	丘陵					"
35	越上丸赤山古墳	標部町	丘陵					"
36	越上丸赤山古墳	標部町	丘陵					"
37	越上丸赤山古墳	標部町	丘陵					"
38	越上丸赤山古墳	標部町	丘陵					"
39	越上丸赤山古墳	標部町	丘陵					"
40	越上丸赤山古墳	標部町	丘陵					"
41	越上丸赤山古墳	標部町	丘陵					"
42	越上丸赤山古墳	標部町	丘陵					"
43	越上丸赤山古墳	標部町	丘陵					"

表1. 湖北地方の前方後円墳一覽表






























郡名	古墳(群)名	年 代		推定郷域
		400年	500年	
伊香郡	(長野古墳群)			伊香郷
	(長山古墳群)			
	瓢箪塚古墳			柏原郷
	涌出山古墳群			楊野郷
	(涌出山古墳)			
	物部古墳群			
	古保利北群			
古保利南群			安曇郷	
東浅井郡	若宮山古墳			朝日郷
	丁野岡山古墳群			丁野郷
	飯喰山古墳群			浅井郷
	丸山古墳群			塩津郷
	(雲雀山古墳群)			岡本郷
	(岡の腰古墳)			田根郷
坂田郡	長浜古墳群			上坂郷
	息長古墳群			朝妻郷
	唐古塚古墳			大原郷
	上塚古墳			上丹郷
	王子古墳			駅家郷

表2. 湖北地方の前方後円墳想定変遷表

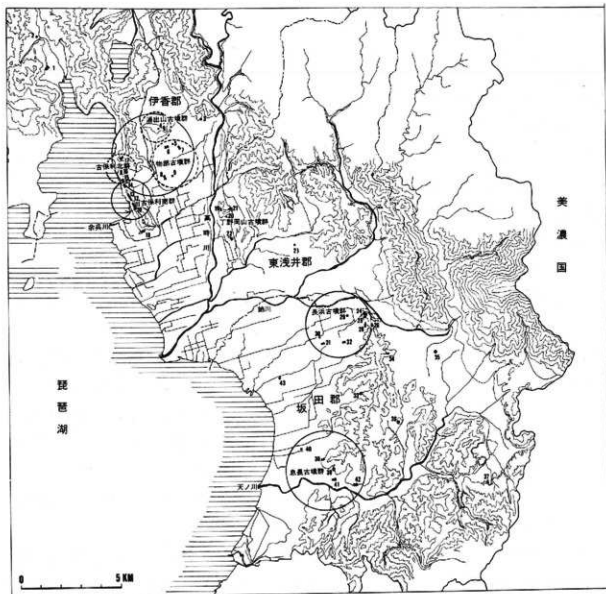


図6 湖北地方の前方後円墳分布図(●は墳形不確定, 数字は表1No.に同じ)

物部古墳群——伊香郡楊野郷(図8・9)

古保利古墳群^④——伊香郡楊野郷・安曇郷(図10)

若宮山古墳群^⑤——東浅井郡朝日郷(図11)[※]

丁野岡山古墳群^⑥——東浅井郡丁野郷

飯喰山古墳群——東浅井郡浅井郷[※]

長浜古墳群^⑦——坂田郡上坂郷(図12・13・14)

息長古墳群^⑧——坂田郡朝妻郷(図15)

なお、※印の一群は、前方後円墳1基と数基の円墳で構成されるもので、その他は、数基の前方後円墳と円墳群から構成されるものである。以上の他に、現在、前方後円墳が単独で分布する

とされるものについて見ると以下の通りである。

横波古墳^⑨——東浅井郡余戸郷

瓢箪塚古墳——伊香郡柏原郷

唐古塚古墳——坂田郡大原郷

上塚古墳^⑩——坂田郡上丹郷

王子古墳^⑪——坂田郡駅家郷

岡の腰古墳^⑫(大型円墳)——東浅井郡田根郷

赤塚古墳(帆立貝式か?)^⑬——坂田郡阿那郷

三の宮古墳(前方後円墳か?)——坂田郡下坂郷

このように見てくると、湖北地方においては、令制の郷域が、およそ、古代の政治的地域集団の範囲であったことが予想されるのである^⑭。しかし、上記の中には、一郷域一墳あるいは一群の通例に反すると思われるものがある。たとえば、古保利古墳群は楊野郷と安曇郷の二郷域にまたがるのではないかと考えられるし、また、楊野郷域と考えられる範囲には、涌出山・物部・古保利の三群が分布するのである。この分布状況を二郷域以上にまたがる政治的地域集団と考え、各群を同一首長系譜の上にのせて考えるのには、他の前方後円墳の分布状況からしても疑問の残るところである。以下では、数基の前方後円墳から構成され、かつて一群として把握されていたものを中心に、「群」の再検討を行い、さらには、畿内政権の動行とのかかわり合いが、現段階でどこまで追求できるか考えてみたい。

まず、古保利古墳群は、8基の前方後円墳と100基程の円墳から構成されるが、およそ、楊野郷と安曇郷の二郷域にまたがると思われる地畧状の山丘に、ほぼ一列に分布していて、一群として見られてきた。しかし、群中、前方後円墳だけを見ると、第75号墳以南のものは、前方部を北面させているのに対し、第80号墳以北のものは、いずれも、前方部を南面させているのである。第75号墳と第80号墳附近を安曇郷と楊野郷との郷界附近とすれば、第75号墳以南の一群を安曇郷域に、第80号墳以北のものを楊野郷域に分布するとすることができる。前方部の方向の相違が、郷域の相違に起因する可能性の強いものとするなら、古保利古墳群を第75・80号両墳を境として、南北二群に分ける必要がある。こうして区別してみると、安曇郷には古保利南群の一群のみが分布し、通例の有り方と一致する。一方、楊野郷には、古保利北群、涌出山古墳群、物部古墳群の三群が分布することになる。楊野郷の三群が同一首長系列に属するかどうか次の問題であるが、これを証明するためには、三群が各々時期を前後して形成されていることが大きな条件と考えられる。また、古保利南群との先後関係も政治的地域集団の様相を知るためにも、まず、明らかにしなければならない点であろう。現時点では、個々の前方後円墳の時期を決めることは困難であ



図7 丸山古墳群墳丘測量図(注③による)

るが、若干の見通しを述べることにする。

古保利古墳群については、南群の第75号墳の墳形測量図が作成されているが、他のものは詳細は明らかでない。ただ、北群の第80号墳は、全長37m、後円部径20m、前方部幅16mで、前方部がかなり開いた形とされ、北群最北端の西野古墳は、全長78m、後円部径45m、前方部幅30mと計測されており、ともに、第75号墳より後出的である。南群の他の5基の前方後円墳については、前方部の低平なものが多い。第75号墳は5世紀前半のものと考えているが、他の5基も5世紀中頃までに納まるのではないかと考えている。従って、古保利古墳群は南群から北群への時間的な推移が予想される。

物部古墳群は5基の前方後円墳を中心に構成されるといわれるが、長塚・兵主神社両古墳については、もはや墳丘は遺存しておらず、古墳であるかどうか決定しがたい状況にある。横山神社古墳についても別添測量図の通りであり、瓢塚古墳も墳形を確定できない状況にある。その中において、姫塚古墳のみ墳形を明瞭にしている。現状では、後円部は、大きく土取りされているが旧状を復元し得る。前方部は、大きく削平されていて復原は困難である。測量調査の結果、残存



図8 姫塚古墳墳丘測量図(京都産業大学考古学クラブ提供)

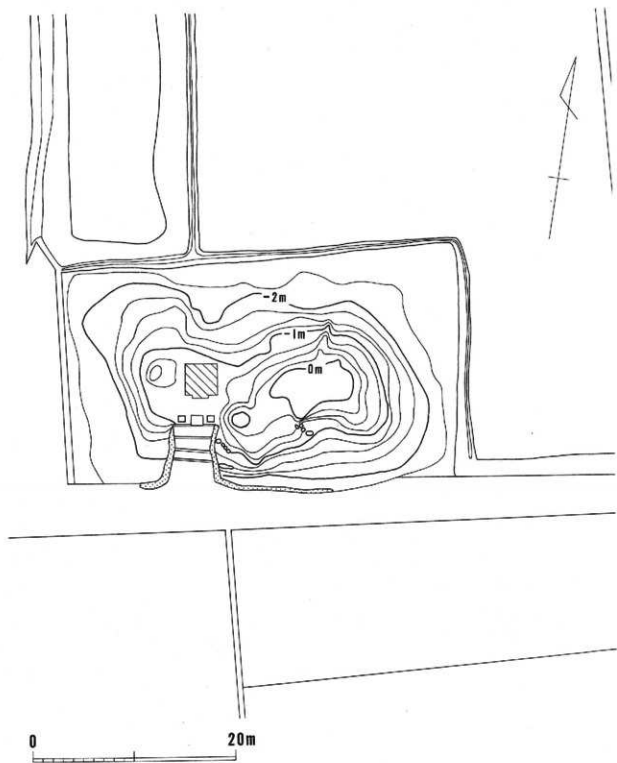


図9 横山神社古墳墳丘測量図(京都産業大学考古学クラブ提供)

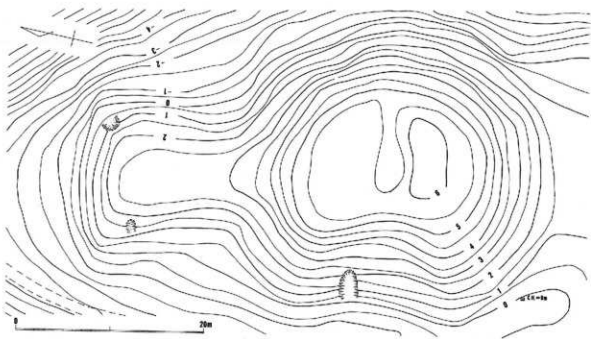


図10 古保利第75号墳丘測量図(注④による)

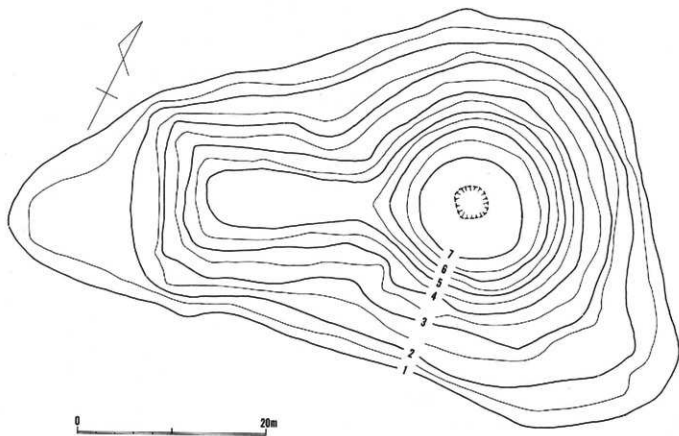


図11 若宮山古墳墳丘測量図(注⑤による)

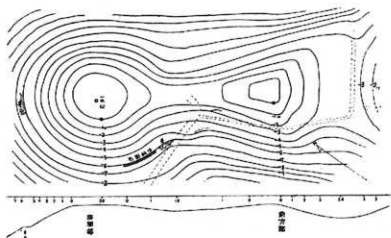


図12 茶白山古墳墳丘測量図(『改訂坂田郡志』による)

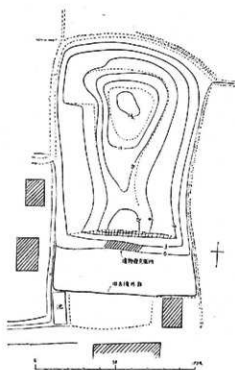


図13 塙籠古墳墳丘測量図(『改訂坂田郡志』による)

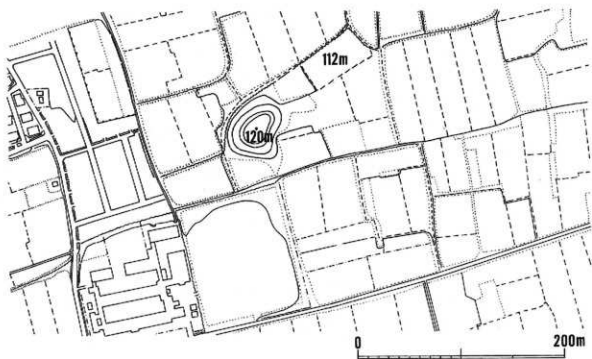


図14 丸岡山古墳地形図(上が磁北)

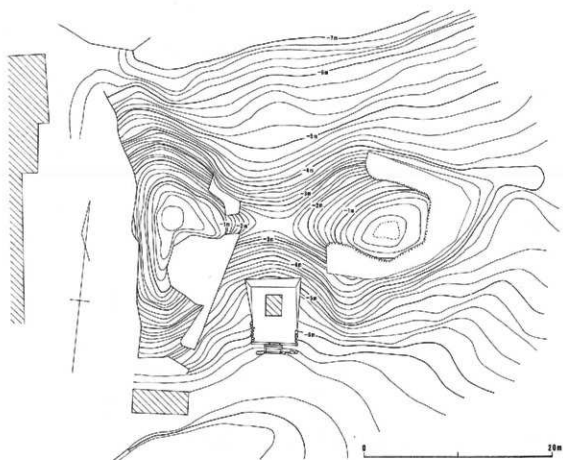


図15 山津照神社古墳墳丘測量図(丸山竜平氏の了解のもとに立命館大学歴史考古学部会より提供を受けた)

全長70m、後円部径48m、前方部長22mを計るが、後円部はほぼH状に近い数値と思われる。現状では本来の姿を復元し得ないのであるが、『伊香郡志』によると、当時で全長204尺、後円部径112尺、前方部長92尺と記載され、その略測図は復元に参考になる。ただ、その数値は、後円部径が郡志当時の方が小さくなっており破壊の進行状況に対して逆行しており、信じがたいのであるが、後円部径と前方部長との比率は正しいと見てよい。今回測量した後円部と郡志当時のものとはその被掘状況が近似しており、さほど変形していないようである。前方部は、今回の測量図とは大きく相違している。従って、郡志当時の後円部径対前方部長の比率112尺対92尺を今回の計測値にあてはめると、後円部径48mに対し、前方部長は39.36mとなり、郡志当時では、全長87.36mの規模を残していたと考えることができる。ただし、郡志当時においても前方部の削平があったらしく、従って、87.36m以上の規模を有していたといえる。姫塚古墳についても、発掘調査による以外、これ以上の復元は望めないが、一つ的手段として、上田宏範の前方後円墳の型式編年^⑧による方法を採用してみることにする。まず、A型式とされるもので求め得る数値は、全長68～88mの範囲に入る。B I型式及びB II型式で80m、B型式で96m、C型式84m、D型式で88mとなる。E型式は後期古墳に多く、当古墳の被掘の状況から横穴式石室の存在は考え難いので、一応除外しておく。以上の求め得た数値のうち、A型式及びD型式が郡誌から復元した数値に近い。A型式は前期古墳に多く、姫塚古墳の立地から見て、除外できるので、従って、D型式に近い形状といえる。また、前方部の削平が大きいのことを考えると、B型式の96mの数値も捨て難い。上田のいずれの型式に当てはめるかはにわかには決しがたいが、ともかく、中期古墳に多いB・C・Dの型式に近似値を求めることができよう。姫塚古墳の時期をさらに限定して考えるなら、平地に立地し、周辺古墳に比べて規模が大きくなっていること、方墳とされるみち塚古墳を陪塚として持っていること等が参考になる^⑨。これらの点を満たすものとしては、仁徳陵古墳、イタスケ古墳、黒姫山古墳、仲津姫陵古墳、允恭陵古墳、応神陵古墳、仲哀陵古墳、墓山古墳、景行陵古墳、河合大塚山古墳、雲部車塚古墳、久津川車塚古墳、塚ノ本古墳、掖上鑑子塚古墳等があげられ、中期前半～中頃のものに限られる。特に、大和、河内、和泉の中枢部を除く地方においては、ほぼ、中期中頃に限定できる。従って、姫塚古墳は、畿内中枢部以外で、中期中頃に、平地に立地して、規模を巨大化する一般的な傾向に沿ったものと考えられ、物部古墳群全体については、詳細を知り得ないが、少なくとも横穴式石室の存在は知られていないので、後期に下るものはないと考えられ、中期中頃を前後する時期に納まるのではないかと考えている。

涌出山古墳群における前方後円墳の数は確定していないが、丘陵最高所（丘陵尾根の東端）に位置する一基は円墳3基を後円部側に伴う。中期的な様相を示すものであるが、詳細は明確にできない。ただ、同墳の東側山腹に、二重にハニワをめぐらせ、簡略化した竪穴式石室を持つ円墳が単独に分布しており、発掘調査の結果、中期末頃に比定できる^⑩であって、涌出山古墳群の下

限を示すものと考えている。

以上のことから、楊野郷域に分布していると思われる三群は、古保利北群→物部古墳群→涌出山古墳群と推移していると思定しているが、各々が連続しているのかあるいは重複して形成されているのかは今後の調査にまたねばならない。従って、これら三群が同一首长系譜に属するか否かについてはわかに決し難い状況であるといわねばならない。ただ、次の点是指摘できると思う。すなわち、楊野郷域の三群に先行するものは、安曇郷の古保利南群であり、さらには、東浅井郡の朝日郷の若宮山古墳群であって、前方後円墳の分布の中心が、東浅井郡朝日郷→伊香郡安曇郷→楊野郷と移動していること、後期に入る前方後円墳が存在しておらず、古保利南群を含め、いずれも中期に形成されていること、中期中頃に、平地に立地して、規模を巨大化していること等である。

このように、一郷域内に二つ以上の群が存在する場合、それらをさらにまとめて一群として考える場合、すなわち、同一首长系譜の墳墓群と考える場合は、現時点ではまだ疑問の残るところである。

次に、一郷域に数基の前方後円墳を持つものとしては、坂田郡上坂郷域内に分布するとされる長浜古墳群がある。当古墳群については、長浜市教育委員会の手で詳細な分布調査がなされている¹⁸。従来、前方後円墳と考えられていた福ノ神古墳は寺院の基壇であり、西塚古墳は円墳が2基存在していることが判明した¹⁹。また、新たな知見として、茶臼山古墳の立地する尾根に南接する尾根上に、前方部を平野に向けたもの、垣籠古墳東方の丘陵の最高所に位置し、前方部を北面させるものの2基が新たに発見された。さらに、丸岡山古墳は、前方部がすでに消滅しているが、水田の形状にその姿をとどめており、東西に主軸を持ち、前方部を東面させた全長 130m に及ぶ大型墳であることが知れ、周囲に周濠があって、これを含めると全長 170m を計ることができるもので、県下でも安土町の瓢箪山古墳に次ぐ規模であることが知れる。越前塚古墳は、現在、長浜市教育委員会によって発掘調査が実施されており、中期末頃の須恵器が周濠から出土している。当墳周辺で、ハニワを伴う円墳が検出されているとのことであり、時代を知る手がかりとなる。上溝塚古墳は、被掘された際、玉類の出土を見ているとのことであり、須恵器類の出土はなかったようである。

以上が新たな知見であるが、これらの点は従来考えられていた古墳群の様相を一変させるに足る情報であろう。まず第1に、長屋敷古墳を除いて、横穴式石室を持つと考えられる前方後円墳が存在しないのではないかという点である。長屋敷古墳は、残存墳丘上に巨石が散乱しているが、地元の古老の話でも、横穴式石室の存在を知ることができなかった。越前塚古墳も調査の結果前方後円墳と判明しても、中期末頃を下限とできそうである。丸岡山古墳については、周囲に須恵器の甕の破片が散乱しているといわれるが、水田にとどめられた形状からは明らかに中期型の

前方後円墳と考えられる。その規模からすれば、中期中頃のもので、姫塚古墳等と併行する可能性が高い。上蔭塚古墳も横穴式石室の存在は考え難い状況である。このように見てくると、平地に立地する越前塚・上蔭塚・丸岡山の諸古墳はいずれも中期古墳である可能性が高いように思うのである。

一方、丘陵上に立地する一群は、茶臼山古墳とこれに南接して新たに発見されたものは同じ立地条件にあり、近似した時期のものであろう。茶臼山古墳は全長92mを計り、従来湖北地方最大のものといわれていたものである。その立地状況より前期古墳とされてきたが、『改訂坂田郡志』の略測図を見る限り、前方部と後円部の高さに差がなく、後円部径と前方部幅が近似した形状であって、やや時期が下るように思われるが、平地に立地するものに先行するものであることは肯定してよい。垣籠古墳は、竪穴式石室から鏡、剣、玉類が出土している。鏡は、腐蝕が激しく、文様は鮮明でないが、大小10個の乳を有しているとのことであり、乳文鏡の可能性が高い。中期以降、後期に多いとされるもので、湖北地方では涌出山古墳の中期末頃の簡略化した竪穴式石室から出土している。副葬品のセット関係も鏡、玉、剣、刀子と同様であり、垣籠古墳は中期後半頃の可能性が高い。丘陵最高所の新たな一基については詳細は明らかでない。

以上から、長浜古墳群は、立地から丘陵上にある一群と平地にある一群とから構成されるのであり、伊香郡楊野郷域における有り方と共通する。また、丘陵上から平地へという時期的な推移がたどれるのであり、平地に立地して、全長130mの丸岡山古墳のように大型化する傾向も共通する。さらに、横穴式石室を持つ前方後円墳の明確な存在が知られていない点も一致している。長浜古墳群においても、編年序列は決しがたいが、平地にあっては、上蔭塚→丸岡山→垣籠→越前塚→長屋敷とたどれるかもしれない。また、丘陵上にあっては、茶臼山→茶臼山古墳に南接する新たな一基→丘陵頂部の新たな一基とし得るかもしれない。この場合においても、立地の相違する二群を同一首长系譜とするには、やはり、今後の詳細な調査を待つしかなかろう。上記のように伊香郡楊野郷と近似した様相を指摘できるということにとどめたい。

次に、古代朝妻郷は、現在の米原町朝妻から近江町能登瀬にかけての比較的大きな地域をさすようであるが、この郷域内には、北より、狐塚・人塚山・後別当・塚の越・山津照神社の5基の前方後円墳あるいは帆立貝式のもの分布しているといわれる。山津照神社古墳は、典型的な後期型の墳型を残しており、主体部の横穴式石室からは、鏡、馬具、須恵器類等多数の副葬品が出土している。須恵器類についてみると、湖北地方後期古墳の編年観では、最古式の横穴式石室を持つ湖北町四郷崎古墳より後出的である。塚の越古墳は平地に立地して、やはり横穴式石室を持つようであり、鏡、金銅装身具、馬具、玉類等を出土したと伝えられている。副葬品のセットは山津照神社古墳と近似しており、両墳とも近似した時期のものと思われる。人塚山古墳からは須恵器類の出土が伝えられる。近江町黄牛塚古墳期程度のもので、6世紀後半のもので、5基

の前方後円墳のうち、最も新しい様相を呈している。後別当古墳は帆立貝形式とされるものである^④。詳細は明らかでないが、帆立貝式古墳は5世紀前半あるいは後半のものが多く^⑤、当墳も中期にさかのぼる可能性がある。狐塚古墳については、詳細は明らかでない。現在、8号線バイパス工事に伴う発掘調査が滋賀県教育委員会の手で実施され、狐塚古墳の一部も路線内に含まれている。結果待ちの状態であるが、中期にさかのぼる可能性が考えられる古墳である。以上より、狐塚古墳―後別当古墳―山津照神社古墳・塚の越古墳―人塚山古墳と編年序列が考えられる。5世紀代から6世紀代にかけての承譜をたどることができ、一郷城内での同一首長承譜の墳墓群とすることができる。従って、息長古墳群を一群として取り扱うことは妥当であるといえる。そして、その変遷は、規模の上では、不明→50m（帆立貝式）→63m・約40m→58mとほとんど変化しないが、後別当古墳の段階で、帆立貝式（あるいは円墳かもしれない）と変化しており、この段階で何等かの影響が予想される。また、横穴式石室採用段階において、なおかつ、前方後円墳の形態を維持しており、湖北地方における当地域の政治的立場を暗示している。また、副葬品の点から見れば、山津照神社古墳から、日本の伝統的な鹿角製刀子が含まれる反面、金銅製装身具や馬具、須恵器類に外来系の先進技術を取り入れている様子がうかがえる^⑥であり、当古墳を支えた基盤の一端を示しているものと思われる。塚の越古墳においても同類の馬具や、金銅製装身具が出土しており、少なくとも、山津照神社・塚の越両古墳築造段階で、大陸技術を模倣しながらも、その技術を一早く摂取したことがうかがえる。

以上、一郷城と推定される範囲内に数基の前方後円墳が分布する主要なものについて、従来一群として見られていたものに再検討を加えて見た。その概略をまとめて見ると、古保利古墳群は、第75号墳と80号墳とを境に二群に区別し得る可能性があること、従って、安曇郷域には一群、楊野郷域には三群の分布が認められる。ともに、古墳時代中期にその造営が限られるようであり、後期には、前方後円墳の造営が認められない。また、楊野郷の三群は、現段階では一列のものとしては疑問が残るが、中期中頃に、平地に立地して、規模を巨大化している。

坂田郡の長浜古墳群は、伊香郡楊野郷城内の有り方に近似して、古墳時代中期にその造営の中心が見られ、後期には、長屋敷古墳が可能性として残るが、明確な前方後円墳が認められない。また、立地も山丘から平地に移行して、丸岡山古墳に見るように、周濠を持って巨大化している。系列的にも、現段階では、一列の墳墓群であるかどうか問題が残る。

息長古墳群は、一応編年的に系列がたどれる。その造営の中心時期は上記のものと異なり、古墳時代後期にあり、中期にさかのぼる可能性のある後別当古墳も帆立貝の形式をとり、巨大化しない。

およそこのようにまとめられよう。上記の地域が湖北地方においては、前方後円墳の分布の中心をなすものであるが、これら以外の、およそ一郷城内に一墳という分布を示すものについても、

一瞥しておくことにする。伊香郡では、高月町洞戸地先に瓢箪塚古墳がある。現在墓地となっていて旧状を明らかにし得ないが、近接して横穴式石室を持つ円墳である鏡頭塚古墳がある。伊香群内では、これ以外に前方後円墳と思われるものを見ない。ただ、伊香郷に入るとと思われる木ノ本町黒山地先に、中期初頭頃のものと思われる方墳2基からなる長野古墳群^㉔、及び、中期末頃と思われる余呉町坂口の長山古墳群が見られる。

東浅井郡では、前方後円墳が集中的に分布する郷域が見当たらないが、朝日郷の若宮山古墳群は、円墳を一基伴い、前期にさかのぼる可能性の強い墳形を示している。しかし、継続するものの分布は認められず、むしろ、伊香郡の安曇郷あるいは楊野郷に勢力を移した観がある。丁野郷域と思われる湖北町丁野地先の丁野岡山古墳群は、独立丘の五つの尾根に五群の支群が認められるが、このうち3支群に前方後円墳が一基ずつ分布するといわれる。山脇東尾支群とされるところでは、全長35mの帆立貝式のものとしてされている。丁野岡山支群のものは全長40m、残る一基は30m程であるが、現地踏査した限り、いずれも墳形を明確にし得なかった。なお、丁野岡山支群については、その南端附近を発掘調査されている。弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土埴墓群とこれに關係する土器類が出土しているが、混在して古墳時代後期の須恵器が出土している。従って、岡山支群は後期群集墳である可能性もあるが、いずれにしても、墳形を明確にできなかったので保留しておく。丁野岡山古墳群の南方の飯喰山に、全長40m程の前方後円墳が数基の円墳とともに分布する。前方部は、後円部径に近い開きを持っており、中期古墳と思われる。北方の塩津郷には丸山古墳群がある。全長21.5mの小前方後円墳で、小円墳一基を伴う。継続して古墳の造営が認められるが、30m及び28mの直径規模を持つ円墳となっている。4世紀末から6世紀にかけての古墳群とされるが、前方後円墳の墳形からすれば、もうすこし時期的に下るものと思う。東浅井郡では、このように、およそ一郷一墳の分布の仕方をしており、時期的にも、前期から中期にかけてのもののみで、後期に下る前方後円墳はなさそうである。東浅井郡では、この他に、田根郷域と思われる浅井町八島地先に岡の腰古墳がある。これは、直径63mの大型円墳で、幅20mに及ぶ周濠を持つ。墳丘部の調査はなされていないが、周濠部の調査ではハニワが出土している。附近には、山丘上の後期群集墳の他に、平地に、亀塚古墳、狐塚古墳等中期にさかのぼる可能性のあるものが分布しており、後に白鳳期の寺院跡である八島廃寺の造営が見られ、今後詳細な調査が望まれる地域である。この北方岡本郷には、中期末の雲雀山古墳群^㉕が、円墳を主体に造営されている。伊香郡の長山古墳群同様、武具、武器を主体とした副葬品が見られる。

坂田郡では、山東町に唐古塚古墳、上塚古墳、正子古墳等が分布する。詳細は明らかでないが、上塚古墳の場合、丘頂に立地し、中腹には猿田彦古墳があり、首長系譜がたどれそうであるが円墳となっている。坂田郡には、この他、三の宮古墳や帆立貝式かと思われる赤塚古墳等があるが詳細は明らかでない。

以上のように、一郷一墳程度の分布を示すものでは、およそ古墳時代中期に造営時期が求められそうである。規模は概して小さく、継続して古墳が築造される場合も、墳形を円墳にしている。

以上、湖北地方における前方後円墳を概観してきたが、およそ、令制の郷単位で首長墓を「群」把握できる反面、伊香郡楊野郷及び坂田郡上坂郷では、葬地の丘陵から平地への移動に伴い、古墳規模の大型化とともに、また、別の一群として見ることも可能であり、同一郷内においても、首長権の交替等を考慮する必要のあることも念頭においておかねばならないだろう。すなわち、前方後円墳に象徴される在地首長層の政治的単位が令制の郷域程度のものであろう反面、その消長は、前方後円墳の変遷が示すように、各郷域によって複雑である。また、その変遷が相互にかかり合いを持っていることは当然予想されるところであり、その相互関係が畿内政権の動行に大きく左右されているであろうことも予想し得るのである。湖北地方における前方後円墳は、現段階では、古墳の内容はもちろん、その編年序列すら明確にできないが、上記してきた範囲内で、各々の相互関係を通覧し、畿内政権の動行とのかかり合いをどの程度追求できるのか、その可能性を求めてみたい。

湖北地方において、最古式の前方後円墳は若宮山古墳であろう。次いで、茶臼山古墳とその南接する丘陵の一基であろうか。丸山古墳や狐塚古墳を含めるにしても、湖北地方における前方後円墳の出現は4世紀末から5世紀初頭頃に待たねばならないだろう。各々の並行関係は不明だが、一郡一墳程度と考えてよいのではないか。ただ、伊香郡には、中期に多数の前方後円墳が築造される反面、前期にさかのぼるものが見られない。前期には、若宮山古墳が伊香・東浅井両郡を領有するかのごとく見えるが、伊香郡では、前期の前方後円墳を見ない反面、おそくとも5世紀初頭には、長野4・5号墳の二基の方墳が築造されている。古墳時代中期の方墳について、畿内政権の軍事的側面から追求したことがあり、畿内政権のテリトリーの伸長過程の表徴としてとらえたことがある²⁰。伊香郡は、湖上交通、北国街道、北国臨往還道と古代幹道の集結点であり、越前をはじめ日本海地方への門戸となっており、その地理的要因から、早い段階で畿内政権の掌握するところと考えてよく、長野4・5号墳の二基の方墳が畿内政権との係りの深い者の墳墓と考えてよからう。伊香郡が、中期段階で最も盛んに前方後円墳が築造されたことと大きな関係があるものと思う。このように見てくると、湖北地方では、まず、東浅井郡で若宮山古墳が出現し、次いで、伊香郡に長野4・5号墳、さらには古保利南群、坂田郡では茶臼山古墳及び南接する丘陵の一基が築造され、郡毎に首長墓の成立が見られる。およそ5世紀前半頃までの現象と見てよく、次の段階でその展開状況に大きな変化が見られるので、この頃までを湖北地方の古墳時代の第1段階としてよからう。

中期の中頃に前後する頃には、伊香郡楊野郷及び坂田郡上坂郷の二地域において、立地を平地に移し、規模を大型化し、かつ、数基の前方後円墳の築造が見られる。第1段階より継続的に同一

郷域内に前方後円墳の築造を見るのは、坂田郡上坂郷域のみであって、伊香郡楊野郷にあっては、これに先行すると思われるものは古保利南群であって、安曇郷に含まれるものと考えられる。中期には、この二地域の他、東浅井郡の塩津郷、丁野郷、浅井郷、坂田郡の大原郷、上丹郷等各地に前方後円墳の築造を見るが、いずれも一代限りの築造であり、規模も小さい。一方、楊野郷域と上坂郷域では、塚塚古墳の88m～96m、丸岡山古墳の136mと前段階の55m及び92mに比べても各段の差をもって大型化し、かつ、数基の前方後円墳の築造を見る。また、この時期には、東浅井郡の田根郷、坂田郡の阿部郷、朝妻郷で帆立貝式あるいは大型円墳が築造され、各地域で複雑な様相を示す時期でもある。ともかく、この段階では、楊野郷域の物部古墳群及び上坂郷域の長浜古墳群で代表される大型古墳が出現する時期で、前方後円墳が各地に築造される反面、規模の上で大きな格差を生じる段階である。

古墳時代後期すなわち湖北地方で横穴式石室が採用される6世紀前半以降においては、前方後円墳の消長が各地域において顕著になる。この段階で前方後円墳の築造を見るのは、前段階で帆立貝式の古墳を築造した息長古墳群のみである。伊香郡、東浅井郡では、横穴式石室を持つ前方後円墳はもはや知られておらず、坂田郡の長浜古墳群においても、長屋敷古墳にその可能性が残されるのみである。前方後円墳の分布で見ると、後期には、息長古墳群で代表される勢力によって、湖北地方が統一された観がある。

このように、湖北地方においては、湖北三部に各々前方後円墳が出現する5世紀前半までの段階、各地に前方後円墳が築造される反面、物部、長浜両古墳群で大型の古墳群が形成される5世紀中頃に前後する段階、前方後円墳が息長古墳群においてのみ築造される6世紀代の段階の三つの段階に分けることができよう。この三段階が畿内政権の動行と大きく係わり合いがあるものと予想するわけだが、次に、湖北地方の前方後円墳の消長と畿内政権の動行との関係について若干触れておきたい。

まず、畿内政権の近江湖北地方にかかわる動行とはどのようなものが考えられるだろうか。湖北地方においては、前方後円墳の出現が4世紀末頃をさほどさかのほらないだろうから、畿内においては、古市誉田古墳群や佐紀古墳群等超大型の前方後円墳群が形成される時期以降の動行に限定してよからう。湖北地方における前方後円墳の展開は第2段階とした5世紀代であって、この時期には、湖北の各地に前方後円墳が築造される一方、伊香郡楊野郷域及び坂田郡上坂郷において、全長100m前後の大型墳の築造を見る時期である。この段階は、畿内政権にあっては、各国諸豪族との同盟連合的な関係を脱して、国造制に見られる中央集権的な全国統一を完成させる過渡的な時期と考えられている²⁸。事実、越前地方では、5世紀後半に入って畿内的な定型古墳が出現し、従来の傍系型古墳もこのころには同化するといわれる。同様に、出雲地方で西部に勢力のあった杵築を畿内政権が押え、意宇の出雲氏を国造とした時期は6世紀に近い頃といわれ、

古備勢力の衰退も5世紀末頃とされる³⁰。このような傾向から、湖北地方の5世紀代の前方後円墳の展開を畿内政権の越前への進出とのかかわりで考えるべきであろう。かつて、古保利古墳群と物部古墳群について、軍事力を持つ物部氏との関連性について考えて見たことがある³¹。詳細は前稿にゆずるが、要するに、物部氏は5世紀中頃から後半にかけて勢力を得てきた比較的新しい氏族であって、その勢力の伸長は畿内政権の東国への進出と密接に関連するものであり、伊香郡及び伊香郡内の地名等から高月町附近が最も関連が深く、物部古墳群が物部氏に関連する者の墳墓群ではないかと考えたのである。古保利古墳群は、特にその南群は物部古墳群に先行する可能性の強いものであり、物部氏の湖北進出以前のものであろうとしたのである³²。坂田郡上坂郷の長浜古墳群も物部古墳群と並行すると考えられる時期に大型化するわけだが、当郷域は在地豪族である坂田氏の存在が推定され、後、継体系王朝の皇親氏族として現われ、坂田酒入氏が郡司階層として見え、同じ坂田郡の总長氏と並ぶ豪族であったことが考えられている³³。一方、この段階に各地に前方後円墳が築造されるが、いずれも、東海地方と日本海地方を結ぶ古代幹道と考えられる北国脇道に沿って分布しており、畿内政権の越前進出とのかかわりを多に予想させるところである。

このように、5世紀中頃を前後する時期の前方後円墳の展開が畿内政権の東国、越前地方への進出とのかかわりでとらえられるなら、これ以前、湖北地方においては、第1段階とした時期と畿内政権との関係はどのように考えられるだろうか。以前、中期方墳の分布状況について、考えて見た時に触れたことがあるが³⁴、その時、一基及至二基を単位として独立して分布する方墳をとらえ、その分布範囲を畿内政権のテリトリーと考えたのである。湖北地方においては、5世紀初頭に、はやくも長野4・5号墳の方墳の築造が見られるのであり、非常に早い段階、すなわち、畿内において、古市菅田古墳群や佐紀古墳群等超人型古墳群が形成される段階で、畿内政権の直接支配下にあったと考えてよい。独立方墳の分布地域は、地理的にも要衝を占めていることが多く、伊香郡も例外でない。古保利古墳群の形成はこうしたこととの関連の強さによるものと思われる。湖北の他地域にさきかけて前方後円墳群の築造がなされたものと思われる。湖北地方北部の様相は、丹波地方の以久田野古墳群と方墳である藤ノ木古墳との関係に非常に類似していて、以久田野古墳群の北側に物部の地名が残り、後に物部氏の進出があったと考えられる反面、これにさかのぼる時期に藤ノ木古墳が築造されるとともに、以久田野古墳群が全長50mを超えることのない前方後円墳群を築造しているのである³⁵。すなわち、高月町附近が在地豪族（伊香連氏の存在が推定されている）の独立的な支配下にあるのではなく、その地理的要所であることも加わって、畿内政権との強い結び付きがあったものと考えられ、前方後円墳の規模も第75号墳の55mを超えることのない小規模なものであることもそのためであろう。長浜古墳群において、その形成初期の茶臼山古墳が92mと大型であることと対象的である。長浜古墳群の場合、その地理的位置から

も、古保利古墳群ほどの畿内政権の紐帯がなかったものと考えてよからう。

以上のように、湖北地方における前方後円墳の消長の第1及び第2段階を推察してみた。すなわち、畿内政権の側からは、第1段階はそのテリトリー-の確立期であり、第2段階は越前地方進出のための拠点の形成期である。なお、第2段階の末、すなわち、5世紀末頃に、武器、武具を副葬品の主体とした円墳群が余呉町坂口の長山古墳群、浅井町山ノ前の雲雀山古墳群の2ヶ所で形成されている。ともに、主墳とし得る大型で副葬品の豊富な円墳1基と小規模で副葬品の貧弱な数基の円墳（方墳を含む—長山古墳群）から構成され、後期の群集墳と異なるものである。この頃に形成される小円墳群は、畿内の辺縁部に多く分布し、中腹部に見かけられないものであって、後期群集墳とは区別し得る性格であるらしいことが指摘されている³⁹。湖北地方の場合、第2段階の終末、すなわち、伊香郡及び東浅井郡で前方後円墳の築造が見られなくなる段階での築造である。上記両古墳群とも短甲の副葬が見られ、特に雲雀山古墳群中からは脇袂式長頸鍬が出土しており、古市古墳群中の黒姫山古墳、藤の森古墳等との共通性が指摘されていて⁴⁰、畿内色の強い古墳群であるということが出来る。この時期的、質的な特徴と前方後円墳の消長との間に何か密接な関連がうかがえるのであるが、ここでは後考に待つことにする。

さらに第2段階の問題として、物部・長浜両古墳群で墳丘規模が大型化する反面、湖北地方においてもいくつかの帆立貝式古墳の存在が知られている。丁野岡山古墳群中の山脇東尾支群の一基、長浜市島羽上南の一基、息長古墳群中の後別当古墳であり、あるいは、浅井町の岡の腰古墳もこれに含め得るかもしれない。さらに、丸山古墳群のように、円墳となるものもある。これら帆立貝式古墳等の年代を知ることができれば、物部・長浜両古墳群の大型化との関連が一層明確になるものと思う。

これらの点はともかく、次に考えられる畿内政権と湖北地方との関係は、継体大王の擁立の問題であろう。時期的には、第2段階の終りから第3段階にかけてである。継体大王について、その祖と美濃、北陸とのつながり、継体と尾張連氏との関連の深さ、近江息長氏や三尾氏との関係等々が論じられ、継体の出自をめぐる論争も展開されている。これらの一々について論じる力量を持たないが、継体が、尾張、美濃、近江、越前の畿外勢力及び摂津、河内の有力氏族の勢力を背景に進出し、大王に就任し得たのであろうことは肯定してよいと思う。

まず、継体関連氏族について、特に、近江湖北地方に関連するものを先学の業績からひろい上げると、尾張連、伊福氏、石作連（以上尾張同祖氏族）、坂田公、酒人公、息長公、山道公、布勢公（以上継体系皇親氏族）等が見られる⁴¹。このうち、石作連は伊香郡石作神社（延喜式神名帳）、布勢公は伊香郡布施立石神社（神名帳）の所在地から伊香郡所在の氏族との関連が考えられ、他は坂田郡の氏族とされている。布施立石神社と石作神社とは、現在、涌出山を東と西ではさむように位置している。涌出山には数基の前方後円墳が分布しているが後期に下るものはない。尾張

同祖の石作連や皇親氏族とされた布施公が同名の神社の所在からその実在性が証明されたとしても、前方後円墳の分布状況からは継体擁立の一勢力として論ずるには資料不足であろう。伊福氏についても、坂田郡に伊吹神社の所在するところから、尾張と近江との関連を論じ得ても、湖北地方における前方後円墳の消長を説明し得るものではない。山道公については根拠地不明ではぶくとして、坂田公、酒人公、息長公については、息長が坂田郡の地名であって、同地名を含む朝妻郡附近がその本拠地と考えられている。坂田公と酒人公とは非常に関連の深いもので、その本拠地は上坂郡附近に求められている。両郡とも息長古墳群、長浜古墳群が所在する。息長氏に関して、その政治的進出は6世紀を大きくさかのぼらない時期、敏達朝に広姫を入内させて以降とし、6世紀以降に急速に進出したもので、それ以前にあっては、坂田酒人氏に従属する小氏であったという意見がある^⑤。すなわち、息長氏と継体擁立との関連性がないという立場である。これは、一つに息長古墳群を5世紀末に形成期を求め、長浜古墳群が4世紀末に、しかもその形成初期に92mの茶臼山古墳が築造されるという認識のためである。しかし、息長古墳群は、すでに述べたように、狐塚古墳の今後の調査成果によっては、その形成初期を修正する必要が生じよう。5世紀の段階にあっては、確かに、茶臼山古墳の92m、丸岡山古墳の136mと長浜古墳群には大型のものが築造されるに対し、息長古墳群では、後別当古墳が帆立貝の形式を取っており、その規模、形態で見限り勢力の格差は大きい。息長古墳群の形成初期が5世紀代の何時に求められるかは今後の課題だが、6世紀代に限っては、湖北地方において、唯一前方後円墳が築造されていることが知れる古墳群であって、その勢力維持の要因を何に求めるかが問題である。この要因を敏達朝の広姫入内以降に求めるのにはやや疑問の残るところである。山津照神社古墳の年代が継体の在位時期に重なるのであり、通説通り継体即位との関連を考えた方が、前方後円墳の築造という源泉を説明するのに妥当性があるように思われる。畿内政権が国造制を通じて、ほぼ全国支配をなしとげようとしている段階で、物部古墳群や長浜古墳群等の大型の前方後円墳を築造せしめた諸豪族においてさえ、6世紀に入る明確な前方後円墳の築造は見られなくなるのであり、息長古墳群に限って、継続的に前方後円墳を築造せしめた要因は、古墳群の年代的な幅から考えても、5・6世紀の境目の政治的動行と関連させて考えるべきであろう。また、継体の擁立及び大和入りに関して、大伴氏、許勢氏、物部氏の支持があったと日本書紀に記載されるが、この点、神武東征伝説との対比から、特に湖北地方に関係の深い物部氏に限ると、神武軍が和歌山の中原に進攻し、大勢すべて決ってから、長髓彦を殺して天皇に帰伏しており、このことから、物部氏は、継体の長い遍歴の後協力体制を取ったと言われる^⑥。伊香郡において、後期に前方後円墳の築造を見ないのは、この地域が物部氏との関連の深い地域であり、継体と物部氏との抗争の結果によるものかもしれない。長浜古墳群における様相も同様のことから説明できるかもしれない。すなわち、現象的には、湖北地方は6世紀の早い段階に息長古墳群によって一元的に統一されて

いるのであり、このことと継体擁立、即位との関係が密なものである可能性の強さを予想させるのである。

以上、湖北地方における前方後円墳の変遷を概観し、畿内政権の動行とのかかわり合いをどこまで追求できるか検討してみた。いずれにしても、各古墳の年代を決定することが先決問題であろう。また、今回調査した瓢塚古墳についても、結局、その墳形を確定できなかったのであり、その他にも、幾例かは現状では墳形の確定を躊躇せざるを得ないものがある。ともかくも、墳丘測量等の基礎資料の作成が必要である。古墳の年代や規模、副葬品の質等の相違等によって、著しく歴史的意味が異なるのであり、以上に述べてきたことは、基礎作業を実施するに当って、一応の目安とするためのもので、今後の調査如何によって、補正する必要があるものである。

おわりに

今回の調査は、直接墳丘部を発掘するものではなく、路線に係る周辺部の調査であった。結果的には、古墳に関する成果を得ることはできなかったが、当古墳が計画路線から避けられ、破壊をまぬがれたことは、当古墳の重要性が認知されたためと解されるのであって、本古墳の性格の解明は、今後、十分な条件を整えた上で実施すべきである。

注

- ①『滋賀県遺跡目録』(滋賀県教育委員会、昭和40年)を中心に集成したが、その他に『伊香郡志』、『東浅井郡志』、『改訂坂田郡志』、等を参考にした。また、長浜市教育委員会 技師 宮成良佐氏の教示に負うところが多い。
- ②池辺弥『和名聚抄郷名考證』(昭和47年)。また、郷の範囲に関しては上記『郡志』等によった。
- ③福田澄男『国道161号線・高島バイパス遺跡分布調査概要報告書』(昭和45年)
- ④田中勝弘『伊香郡高月町古保利古墳群調査報告』、『昭和48年度滋賀県文化財調査年報』、昭和50年)
- ⑤前掲書④。丸山竜平・福田澄男『湖北の古墳とその世界』、『古美術』第27号、昭和45年)
- ⑥『北陸縦貫道関係分布調査報告書』(滋賀県教育委員会、昭和47年)。別所健二他『丁野遺跡』、『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書』II、昭和51年)
- ⑦岩井豊章『近江国坂田郡北郷里村字垣藏古墳に就きて』、『考古界』第7巻第八号、明治12年)。宮成良佐『高田遺跡(長浜電報電話局敷地内所在)調査報告書』(昭和55年)
- ⑧島田貞彦『近江国坂田郡能登瀬の古墳』、『歴史と地理』第15巻第3号、昭和1年)
- ⑨実地踏査により実見。
- ⑩実地踏査により実見。
- ⑪実地踏査により実見。
- ⑫山崎寿二『岡の腰古墳・浄土寺遺跡調査報告』、『ほ場整備事業関係遺跡調査報告書』ほ場整備事業にともなう文化財調査報告書II、昭和50年)
- ⑬宮成良佐氏の御教示による。
- ⑭門脇恒二『日本古代共同体の研究』(昭和46年)、塩沢君大『古代専制国家の構造』(昭和46年)等ていわれる『農業共同体』、『小共同体』が、後の令制の郷に対応するものと解釈し得る要素となろう。
- ⑮上田宏範『前方後円・後方墳』、『新版考古学講義』5 原始文化(下)、昭和45年)
- ⑯田中勝弘『方墳の性格一特に、近畿地方における中期方墳について…』、『古代文化』第32巻第8号、昭和55年)
- ⑰田中勝弘『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書一高月町涌出山古墳一』、『郷』(昭和57年)
- ⑱前掲書⑦
- ⑲宮成良佐氏の御教示による。
- ⑳田中勝弘『湖北地方の後期古墳の編年一最近の調査例を中心に一』、『近江地方史研究』第3号、昭和51年)
- ㉑前掲書⑥
- ㉒小野山節『大古墳の世紀』、『古代の日本』5 近畿、昭和45年)
- ㉓前川明久『継体天皇擁立の勢力基盤について』、『古代文化』26、昭和49年)
- ㉔田中勝弘『木ノ本町黒田長野古墳群』、『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書』V、昭和55年)
- ㉕『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書』VI(昭和56年)
- ㉖直木孝太郎他『滋賀県東浅井郡湯田村雲雀山古墳群調査報告』、『大阪市立大学文学部歴史学教室紀要』第1冊、昭和28年)
- ㉗前掲書⑩
- ㉘八木充『因造制の構造』、『岩波講座 日本歴史』2 古代2、昭和51年)
- ㉙近藤義郎編『日本の考古学』IV 古墳時代上(昭和42年)
- ㉚前掲書④
- ㉛大熊信弥『伊香連氏について一近江古代家族ノートー』、『日本史論叢』第6輯、昭和50年)では、古保利古墳群や物部古墳群等を式内伊香具神社附近を本拠としていた伊香連氏の一列の墳墓群とされている。伊香連は、も

ともと物部氏の配下であって、後、その宗教的傾向から中臣氏同族を主張するようになったとされる。古保利古墳群等が一系列の首長墓群があるということは疑問の残るところであろうが、安曇郷から楊野郷への墓地の移動は、大槌氏の言う物部氏の配下から中臣氏同族主張への変化に対応するのかもしれない。そうであれば、伊香連氏は伊香郡の大半を領有する在地豪族で、葬地の変化は内部の首長権の交替を意味するかもしれない。また物部古墳群を物部氏進出によるものとするより、前掲書⑭で述べたように、畿内政権の一時的な弱体化に伴う中央集権的紐帯の緩みに乗じた在地豪族の勢力の復活と見た方が良いかもしれない。同様のことは長浜古墳群における丸岡山古墳の大型化についても言えるところであろう。

⑭原島礼二『倭の五王とその前後』(昭和46年)

⑮前掲書⑭

⑯京都府教育委員会編『京都府遺跡地図』(昭和47年)、京都府立丹後郷土資料館編『興丹地方の方墳』(常設展示資料4、昭和53年)

⑰都出比呂志『横穴式石室と群集墳の発生』(『古代の日本』5近畿、昭和45年)では、後期群集墳と同質かどうかの再検討を要することが述べられている。

⑱野上丈助『古墳時代における甲冑の変遷とその技術史的意義』(『考古学研究』第14巻第4号、昭和43年)

⑲前掲書⑱

⑳大橋信弥『息長氏について—近江古代豪族ノート—』(『日本史論叢』第8輯、昭和55年)

㉑直木孝次郎『日本古代国家の構造』(昭和44年)



瓢塚古墳 遠景



瓢塚古墳 近景



第1トレンチ全景



第1トレンチ断面上層(1)



第1トレンチ断面土層(2)



第1トレンチ断面土層(3)



第2トレンチ全景



第2トレンチ断面土層(1)



第2トレンチ断面土層(2)



第2トレンチ断面土層(3)



第3トレンチ断面土層(1)



第3トレンチ断面土層(2)



第4トレンチ全景



第4トレンチ断面土層(1)



第4トレンチ断面土層(2)



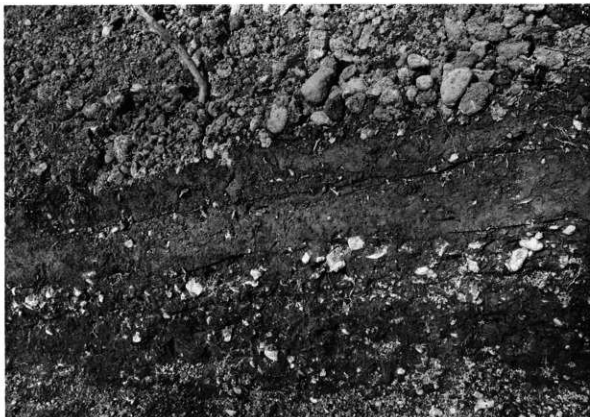
第4トレンチ断面土層(3)



第4トレンチ断面土層(4)



第4トレンチ断面土層(5)



第4トレンチ断面土層(6)



第4トレンチ断面土層(7)



第4トレンチ断面土層(8)



第4トレンチ断面土層(9)



第4トレンチ断面土層 (10)



第4トレンチ断面土層 (11)



第5トレンチ全景



第5トレンチ断面土層(1)



第5トレンチ断面土層(2)



第5トレンチ断面土層(3)



第5トレンチ断面土層(4)



第6トレンチ全景



第6トレンチ断面土層(1)



第6トレンチ断面土層(2)



第6トレンチ断面土層(3)



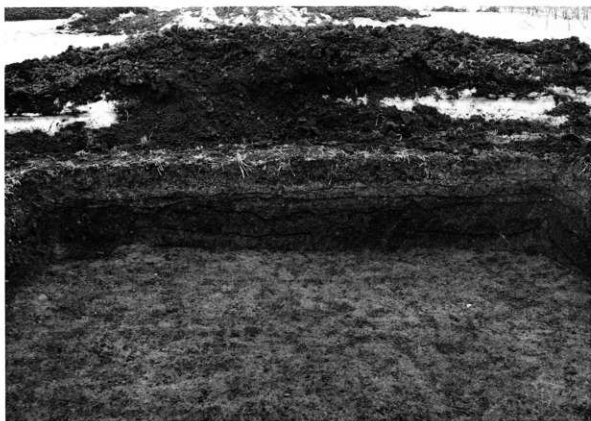
第6トレンチ断面土層(4)



第7トレンチ断面土層 (1)



第7トレンチ断面土層 (2)



第8トレンチ断面土層(1)



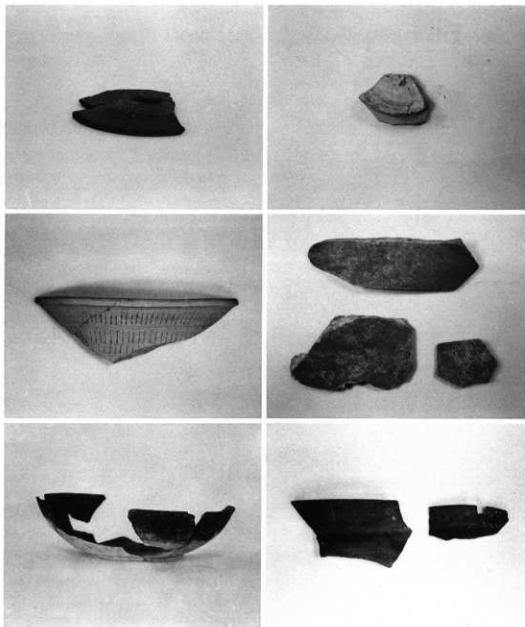
第8トレンチ断面土層(2)



第7トレンチ遺物出土状態



第7トレンチ遺物出土状態



出土遺物



孤草塚古墳



横山神社古墳



縣塚古墳



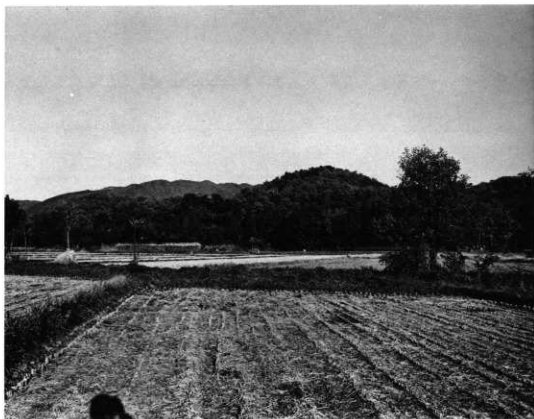
姫塚古墳



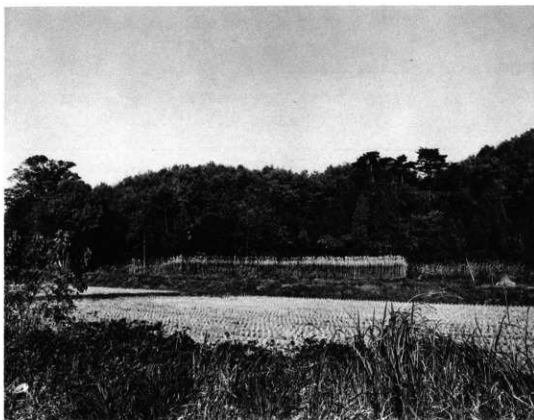
涌出山古墳群



飯噺山古墳



長浜古墳群（丘陵上の一群）



茶臼山古墳



茶臼山古墳 (南雑丘陵の一基)



垣籠古墳



長屋敷古墳



越前塚古墳



上野塚古墳



丸岡山古墳



狐塚古墳



人塚山古墳



塚の越古墳



山津照神社古墳

1982
昭和57年3月20日

北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書Ⅶ
(高月町瓢塚古墳)

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会
財団法人 滋賀県文化財保護協会

印刷 株式会社 中村太古舎
大津市京町三丁目4-32